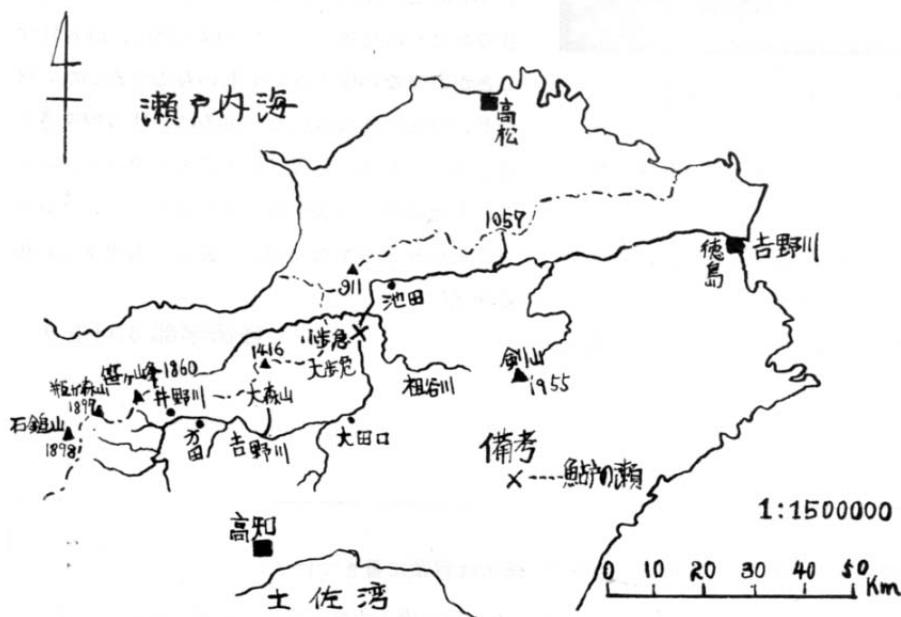




〈図1〉

別名『四国三郎』と呼ばれる吉野川は、四国山脈・石鎚山（1981m）の東、瓶ヶ森にその源を発し、高知・徳島の両県を経て内海に注いでいる四国第一の長流であり、かつ激流でもある。その長さは194Km、平均落差約200分の1である。

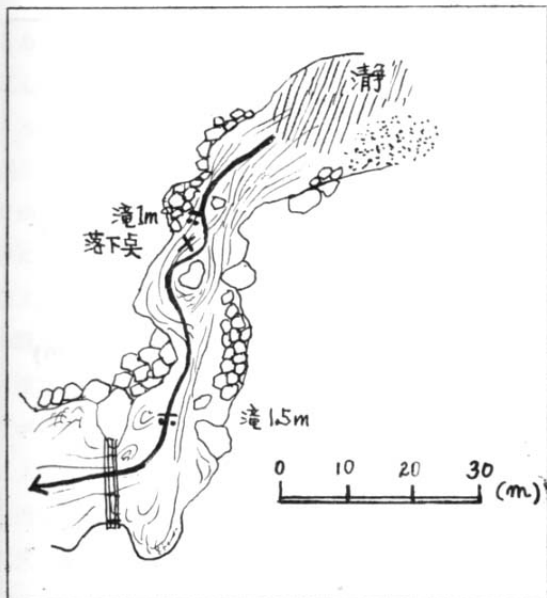
我々隊員8名は、早春3月25日、航行可能の限界地点である高知県土佐郡大川村井野川に向けて出発した。船、汽車、バスと乗り継いだ後、我々一行が井野川についたのは26日の夕方であった。

阿波池田町
（最終航行地点）
から、この川の様子を眺めてきた我々は、如何にこの川が、バラエティーに富んでいる川であるかということ、を、各自再確認したのである。
激流あり、瀬あり、巨岩・奇岩あり、その間を駆け抜けるように、あるいは威風堂々ゆつたり

と歩くが如く流れるこの吉野川というものを。

翌27日から航行は決して生易しいものではなかった。11℃の気温の中で、7℃の冷水を体に浴び、身震いしながらウエットスーツを着て、地下足袋を履く。水温7℃は黒部川の水温（13℃）よりも低い。

午前8時30分、着衣もボートの準備も終り、いよいよ出発、胸の中でこの合宿の意義を再度、かみしめる。それと同時に、これから先、阿波池田までどのような瀬が、瀬が、我々を待っているのか、果たして汽車やバスの中で感じた程、容易



〈図2 方田〉

なものだろうか。不安と征服欲が入り混じる。出発の合図で2隻のボートが、鏡のように滑らかな静を、すべり出す。20mも行かないうちにボートがようやく通れる程の非常に狭い小さな瀬に入る。水量が少ないためか、ボートの底を擦る鈍い音がする。波という程の波ではないが、白波を突き破りながらボートは変幻自在に型を変えて進んで行く。

午前9時頃、大ボート(10人用)が岩と岩の間に入りこんでしまった。水が容赦なく浸入し、すぐ、溢れ出す程、貯つてしまった。全員で持ち上げようとするがビクツともしない。瀬の中に入り上げてみたら、オールをテコ代りにして上げてみたり、水の浸入する側を上げてみたりするが、頑として動かない。最後の手段だ。ボートの空気を少し抜き、その屈曲性を利用する。やつとこのことで、ボートを引き出すことに成功する。キスリングの中にも多量の水が入り、1人ではかつげない。逆さにすると、ザーツという音と共に、勢いよく水が流れ出る。ここで約1時間のロスをして

しまった。この地点から30分程、下つたところで偵察時にマークしていた最初の難関に出会う。(図2参照)。この図からもわかるように、川幅が非常に狭く、ボートは右から入り、少し左に切り、又、右へとコースをとらねばならない。そして、出口の部分で90°右に曲つているのである。しかも、その場所には水面より約1m上に竹の橋が掛けてある。

コースとしては非常に難しい部類に入る。全員で綿密なルート検討を行い、まず小ボートから下ることにした。右より入り、右岸の浅い部分を選んで少し左に切る。正面の巨岩に当たりそうになつたため、ただちに右にコースを切る。同時に、波をかぶり、その反動で前方の海老原君が滑り落ちてしまった。流れは我々を最悪の状態に追いこんだのである。すぐ隣に乗つていた私は、とつさに彼の手をつかんだ。ボートは流れにまかせるしかない。すぐ彼を引き上げた。ボートはすでに竹橋の手前まで来ている。グラツと傾くと同時に水が勢いよく流れこんだ。「畜生! 転覆か。」そんな言葉が脳裏をかすめる。しかし、ここでボートの吸着性がいかんなく発輝された。ボートは、傾きながらも水面に密着したまま奔流を流れ出たのである。安堵の溜息が3人からもれる。緊張感がなかなかとれない。

この最初の難関をどうにか切り抜けはしたものの、下流に行けば行く程静が多くなり、やがて、オールを漕ぐ音だけしか耳に入らなくなつた。瀬らしき水音は全く聞えない。全員疲労の色が濃くなり、オールを握る手にも力がこもらない。しかし、予定地の田井には絶対到着せねばならない。夕暮れになり始めた西の空を時々振り返りながら我々は田井を目指してオールを漕いだのである。

そして、翌々日(29日)、景勝地として有名な大歩危・小歩危に向つた。前日とは全く異なつ

た川の状態、即ち、流れは静においてかなりの速さで流れており、加えて瀬が非常に多く、両岸は10m前後の絶壁状をなした奇岩の連続なのである。この地点において我々はこの川の最大の特徴である大波にぶつかった。

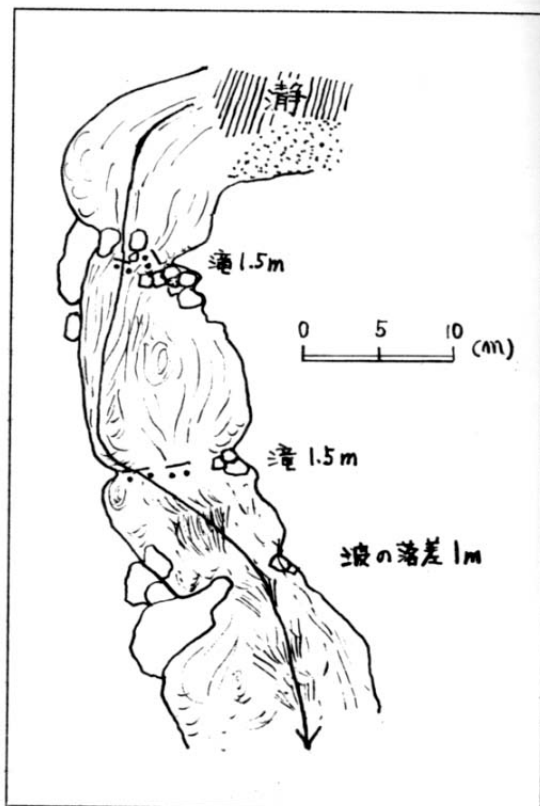
ボートは波と波の間を見え隠れしながら進む。波の凸部にボートが当たると、岩がくずれるように波が飛沫となつて散る。そんな瀬が数10mも続くと、ボートの中は水浸しとなり、タツパウエアがブカブカ浮んでいたりするのである。

急流における波というものは川底の凸凹と非常に密接な関係をもっている。加えて、流れが早ければ早い程、流れは底部の凸凹とより激しい衝突をし、その巨大なエネルギーが川面に現われ、波を形成するのである。波頭の底部には、必ず巨岩が横たわつているといつてもさしつかえない。

大歩危を航行中に、小ボートがそのような波によつて危うくバランスを失いかけたこともしばしばである。これは、波によるボートの進行方向に対する顕著な影響の一つであらう。このような状態を繰り返しながら、我々はボートの波に対する限界を把握しつつ、大歩危、小歩危を下つたのである。

そして30日、我々がこの川最大の難所と折紙をつけた鮎戸の瀬にさしかかった。

この瀬は長さ約40mでくの字型に曲がりながら流れており、ほぼ中間点で右岸に流れが激突し非常に狭い出口に向つてそのまま殺到しているのである(図3参照)。我々は落差、波の大きさ等から小ボートによる航行は断念し、大ボートだけで決行することにした。コースとしては右岸ぞい(地図では左岸ぞい)に入ると同時に、思い切つてボートを川の中央に向け、右岸へ激突するのを避けると共に、流れの反動を利用して大波に向かうことにした。



〈図3 鮎戸の瀬〉

そして森氏と私が前方に乗り、簗島氏と引地氏が後方に乗り、出船したのである。まず右岸ぞいに入ると同時に、約1mの滝に突込んだ。滝を出ると共に左から奔流に流され、ボートはまたたく間に右岸に持つて行かれた。滝によつてすでに半分の位、水のたまつたボートは思うように動かない。ボートの左に乗っている森氏と引地氏が懸命に逆漕ぎをする。右側の私と簗島氏は必至に順漕ぎをする。「ぶつかる!」と思つた瞬間、ボートは右岸に水しぶきをあげて、方向転換し、出口にむかつて猛進。「よし!」それぞれの声が飛ぶ。しかし、ボートは出口に向つて左へ約30°その向きをかえたまま進んでいる。「山地!逆漕ぎだ、逆漕ぎだ!」「森、もつと漕げ!」後から声がかかる。指示通りに懸命に漕ぐ。ボートは前方の約1m半

もあろうかと思われる程の大波に向かって方向を正し、進んでいる。「落ちろぞ！」の声で全員ザイルに手をかける。と同時に吸い込まれるような感じで大波の凹部に入る。まち構えていたように波が顔面といわず、体といわずたたきつけてくる。目に少し入ったため前方がばやけてみえる。「また大波だ！」と声をかけると同時に、ザーツと水が浸入する。前方の波は目に見えて小さくなる。「成功だ！心にそんな予感が走った。水を満載したボートは、一度岸に寄り水抜きを始める。よくも入ったものと感心する程、ヘルメットで出しても出しても一向に減った様子がない。「もしや底に穴があいたのでは！」そんなことを考えながら

10分間もかかつてようやく水を抜き終ったのである。

そして、すぐ小ボートを浮べて、阿波池田へと目指したのである。ゴーゴーたる水音が次第に小さくなり、やがて視界からも消え、川幅も100m以上となり、流れも嘘のように穏やかとなつた。はるか前方に山並みが見える。

「さあ、池田も近いゾ、頑張ろう！」誰かの声が聞こえた。少し逆風だが、全員ビッチをあげ、掛声と共に力強くオールをひいた。川はさざ波をたてながら、ゆつくりと流れていた。

(法学部3回生)



希望にとつては無限とも思われる苦悩に耐え

死や夜よりも暗い誤ちをゆるし

絶体とも思われる権力に抵抗し

その志をかえず、よろめかず、悔いることなきものは

よき人であり、偉大な人であり、喜ばしき人であり、美しき人であり、自由な人である

これのみが、人生を、幸福を、自己の領域を、そして勝利を。

ジョン・リツジウエイ

— 大西洋ボート横断の航海日誌より —